

翻 訳

中国社会学発展史上の四つの時期

蔡 毓 聰 著
星 明 訳

〔訳者まえがき〕

この訳稿は、1931年4月の『社会学刊』（第2巻第3期、中国社会学社）に掲載された蔡毓聰の「中国社会学発展史上の四個時期」の全訳である。蔡は、「序」で中国の先秦諸子、古代ギリシャの哲学者プラトン、アリストテレスらの社会思想を社会学とは異なるものとしているし、また中国にはもともと社会学は存在せず、西洋から直接的に、日本から間接的に輸入されたものと述べている⁽¹⁾。つまり、社会思想と社会学を峻別し、社会学は中国固有のものではなく輸入品であるとしている。

蔡は、嚴復がH. スペンサーの *The Study of Sociology* (1873) を『群学肄言』というタイトルで翻訳・出版した1903年から、自らの論文が擱筆された1930年12月までの30年弱の中国社会学の歴史を4期に区分して論じている⁽²⁾。すなわち、第1期：社会学が最初に輸入された時から1910年代初期までの輸入期、第2期：1919年の学生運動の直前から1925年までの移植期、第3期：1925年から1930年までの萌芽期、第4期：1930年ごろにようやく入ったとする建設期の4期である。蔡は、1925年5月30日の五・三〇運動が中国社会学の発展史上の重大なキーポイントとなるといい、萌芽期はこの時にはじまるとした。

われわれはこの蔡毓聰の論考をとおして、中国の社会学の30年間にわたる発展の推移とその内容を具体的に知ることができる。訳者は、一つの学問の成立は研究者数が一定数に達した時、一定数の大学にカリキュラムが開設され、学科、学部が設置された時、学術団体が創設され、かつ機関誌が発行された時、他の学界、行政、さらに一般社会にその学問が認知され広まったばあいなどが指標になると考えている。だとすれば、まさに中国社会学の確立の過程を知ることができた。

一 序

知識は決して手品ではないし、またどんな神聖な最高の道理でもない。ただ人びとが日常累積した経験の産物にすぎない。理論はこれらの経験が到達した事実についての一つの解釈である。ある国あるいはある時代の理論は、ほとんどその国あるいはその時代の経験が到達した事実についての解釈である。

このために、社会現象についての解釈であれば社会学だと考えるひとがいる。そうであれば、われわれは、社会学の研究は、われわれの中国では少なくともすでに 2000 年の歴史があると解釈できるし、あるいは 2000 年前にすでに非常に発達したということができる。先秦諸子の社会思想は言を俟たないし、いくつかの学派もある。そのうえ大部分は自分の説をうまくこじつけるのが上手であるし、意外にも非常に輝かしく完備しているものがある。しかし、それにもかかわらずわれわれの眼中にある社会学は社会思想と同じではない。われわれはプラトンやアリストテレスらの思想啓蒙上の地位を認めるが、われわれはただかれらを社会思想家として認めるだけであり、社会学者として認めることができない。わが国の先秦諸子について、われわれもただ同様の見解を抱くことができるだけである。

ここで少し説明しなければならぬことがある。人類は互いにさまざまな接触があったし、さらに社会をつくりあげたともいえる。社会を安定させ、社会制度を確定させ、社会組織を改良進歩させるために、人びとは既存の制度と既存の組織の長所と短所を経験した。社会思想とは人びとが批判したり、立て直しを図ったりしたりする主張であり、社会思想の主要な任務は新旧の制度の優劣を選別することである。この種の思想は、既存の体系が破綻しそうな時に、とくに顕著であり、先秦諸子が好例である。しかし、人びとのそれぞれの拠りどころとする立場は異なっており、一致する意見はあるはずはなく、通常みることができるのはただ時代の動向にすぎない。これは、もし社会思想を社会学だと考えるならば、だとすれば社会学史はすべての思想史を含まなければならないし、そのうえ人類の起源から記述しなければならないことを物語っている。

いまわれわれは、社会学とはなにかを述べる必要がある。現今の一般的な社会学者の認識では、社会の科学的研究だけが社会学である。したがって通常はいつも、A. コントの『実証哲学概論』を画期的な著作だと考えている。どの書物も、コントが最初に社会学に言及した人物としている。実際に、社会学の最初の学名の **Sociologie** という名称も 1839 年によくあらわれた。したがって、われわれは社会学が近代の産物であり、西洋の産物であるときっぱりとすることができる。

ここにおいて、われわれは中国にはもともといかなる社会学もなく、社会学は確かに直接的か間接的に、西洋から中国に輸入されたものであることを認めることができる。われわれは科

学、とくに人間の行動を研究対象とする社会科学に対して、本国のひとがいくらかの貢献ができ、種々それぞれの弊害を防ぐことを望むけれども、しかしこれは口でいうほど簡単にはいかず、決して一朝一夕でなしえることではない。過去の史実に照らして、これらのばあいには、われわれは隠し立てする必要はなく、西洋から輸入であるときっぱり認めなければならない。著者の直感的な見方では、中国社会学の発展史はわずか30年であるけれども、四つの時期に区分することができる。すなわち輸入期、移植期、萌芽期および建設期である。もしあえて各時期の期間を断定するならば、第1期の輸入期は社会学が中国に最初に輸入されてから民国初年までで、第2期の移植期は1919年の学生運動の直前から1925年の五・三〇運動のうねりまでである。五・三〇運動は中国社会学の発展史上の重大なキーポイントをなし、第3期の萌芽期はこの時にはじまった。最近、ようやく第4期の建設期に入った。大まかな区分はこのようである。以下の叙述はこの順序に沿って行なう。

二 社会学の輸入の初期

われわれが知りえる中国語の社会学書からいうと、いちばん早いものは巖復が翻訳した『群学肄言』である。この書の原名は *The study of sociology* であり、イギリスの著名学者 H. スペンサー(ス賓薩)が著したもので、1873年に刊行された。「訳者あとがき」によれば、訳者は光緒7年と8年の境目(すなわち1881-82年)にはすでにこの書を購入して読み、その後1898年に国聞報社のために前2章を訳した。間もなく事情により途中でやめられたが、1903年のはじめに全巻の翻訳が完成した。

もしわれわれが現在、ただこの訳本の現行本、すなわち商務印書館の刊行本だけを根拠に、しかも奥付だけを根拠にすれば、恐らく誤りを免れず、初刊は戊申の年(1908年)と思うだろう。実際のところ、同時期に高鳳謙が序のなかで、「その版は散逸して久しいので、再版を請う」と言及していることは、以前に印刷されたことがあり、そして商務印書館本はその後の再版本であることを証明するに十分足りる。調査した結果、初版本は上海文明編訳書局から出版され、糸綴じの4冊に分けて装丁されていた。つまり、巖復が翻訳を完成してまもなく、光緒29年(1903年)5月に刊行された。

同じ時に、巖復にはまだ『社会通詮』がある。この書は E. Jenks(甄克思)著の『政治史』(*A History of Politics, 1900*)の訳書であり、原作は各時期の社会制度の進化を解釈しており、簡単に要領がよく、かつ文章の文体もよい。しかし、巖の訳書は古く優雅な文語体を採用し、理解に時間がかかり、難解なところもあるので、最近郭昭熙君がこの本を口語体で改訳し、『社会史綱』と改名している。社会学の知識を広める面で、確かによいニュースと考えることができる。巖復が訳した26, 27年後に、なお再訳の価値があると感じるひとがあることは、巖復の見識が高いことを証するに足る。

しかし、別の調べでは嚴復は社会学を中国に輸入して紹介した最初のひとではない疑いがある。戈公振著の『中国報学史』のなかに、『国民日日報』の印影があり、そこに『社会学原理』の広告がある。この『国民日日報』の発行日は1903年8月9日、すなわち光緒29年6月17日であり、『群学肄言』の出版日からわずか1か月ほど後であるが、広告のなかには「久しく国内で歓迎されている」などの文字がすでにある。だとすればこの書の初回の発行は確かに『群学肄言』より以前のものである。また、天津の『国聞報』は1897年に成立したことが調べてわかった。嚴は当時、すでに帰国して数年経っており、その時期の留学生はまさに少なく、しかも新聞社は大体、掲載材料の不足で困っていたので、嚴の訳文はきっと『国聞報』が喜んで掲載するにちがいがなかった。だとすれば嚴の訳文は『社会学原理』の出版以前であることは恐らくは確かである。

この1903年出版の『社会学原理』は2年以上も捜しているけれども、いまだ入手できていないのは残念である。広告に人類の生存競争、自然淘汰などの文字があることも、スペンサー学派の著作である可能性があり、研究者の仲間のなかではスペンサー著の *The Principles of Sociology* (vol.1-vol.3, 1876-1897) ではないかとの疑念があるが、根拠が不足しているようであるし、しかもこの書の字数はわずか9万字余りである。スペンサーの *The Principles of Sociology* はその4倍であり、それではないことを証するに足る。日本語からの訳の疑いがあるが、それは比較的信用できる。この書は、いったい、著わされたものか、訳されたものか、著者はだれかなどの問題があり、いまはいずれも決定する手がかりがない。社会学の名称がもっとも早く採用されたのは、当然この書を真っ先にあげるべきである。現在、この書を探す方法がない以上は、われわれは『群学肄言』が中国語で最初に発表された本であると認めことができ^③、嚴復が最初に社会学を中国に輸入したひとであると認めることができる。

社会学が最初に中国に輸入された事情を理解するには、われわれははじめに嚴復がいた時代を理解しなければならない。

1840-42年、イギリス軍はアヘン戦争で江蘇省と浙江省の多くの地を続けざまに攻め落とし、続いて1860年にイギリスとフランスの連合軍は天津と北京を占領した。政府は大きな痛手を受けてから、はじめて軍事を整えなければならないこと、そのうえわが国固有の兵器は西洋の性能の高さにははるかに及ばないことをはじめて知り、1876年に留学生24人をイギリス、フランスなどに選抜して派遣し、軍事知識を研修させた。嚴復は当時福建船政学生の資格で派遣された一人である。嚴復はイギリスに到着後、イギリス海軍学校に入って修学し、時間に余裕のある時はいつも国家の大事を心にとめており、両国の優劣の比較に心を尽くし、中国の国勢に活気がないのは、軍事を怠っていただけでなく、ほかにたとえば科学思想なども全部が立ち遅れていたからだを知った。嚴復が訳したそれぞれの書は、社会学以外にも、思想を整理した(J. S. ミルの)『穆勒名学』(*A System of Logic*, 1843)と法治精神を唱道した『群己權界論』(*On Liberty*, 1859)、(W. S. Jevons の)『名学浅説』(*Elementary lessons in logic*?, 1870)、(C.

L. S. モンテスキューの『法意』(法の精神)、経済学の重要な著である(A. スミスの『原富』(国富論)、生物学の傑作(T. H. ハクスリーの『天演論』(*Evolution and ethics*, 1873)があり、これらは、中国の学術を充実させたことが明らかである。うへの各書はすべて翻訳する価値のある名著であり、そのなかの『法意』以外はすべてイギリス人の著である。スペンサーは当時イギリスの学術界ですでにすこぶる盛名をうたわれていた。したがって、嚴の訳書のなかにスペンサーの著書もある。

中国の初期の留学生の大部分は年少で、本国の文字さえ多くはまだすらすら読めない。当時の書きことばは、古文調で難しく、幼い留学生たちは古文の基礎が弱いから、後ずさりする一つの原因になっているといわざるをえない。西洋の学説を紹介する責任は、結局嚴復一人が担った。

嚴復は成功し、かれが訳したそれぞれの書は中国で勢いを生みだした。まぎれもなく、当時の中国の士大夫(知識層、官僚層)は、西洋人についてすでに敢えて蔑視しなかったが、しかしただかれらの兵器は比較的優れていると認めるだけであり、文章の力と国家統治の方策はなおわれわれに遠く及ばないと思っていた。実際には、この尊大ぶった観念は、いまま時にはわれわれにもまだ見受けられる。この状態について、嚴は非常に明確に理解している。したがって、嚴の訳書は古風な優美さを求めており、朗々と朗誦できるまでになり、士大夫が西洋の文章を睥睨する心理をすっかり払いのけた。

もしわれわれが嚴の過ごした時代および嚴復の苦心のあるところを理解するならば、嚴が古風で優美な文章のスタイルを取り入れたことについて、非難するのはむずかしく、敬意さえもあらわすべきである。われわれは、もし当時嚴が古風で優美な文章のスタイルを取り入れなければ、きっと士大夫の書齋に受け入れられなかったと、だとすればその働きはどこから生まれたのか、すぐに想像することができるであろう。

『群学肄言』が中国語で発表された最初の社会学の書籍(ママ)である以上、その原著者スペンサーの経歴もわれわれは叙述する価値があろう。スペンサーは1820年にイギリスのダービー地方で生まれた。幼児期にかれの家族(かれの祖母、父親および叔父を含む)の影響を受けた。すなわち、英国国教会に深く反逆する傾向と、そのうえ同時に政治改革に熱心な傾向の影響である。少年期に、正式に小学校に入ったが、僅か数年にすぎなかった。1836年以前に、ケンブリッジ大学を受験する計画をして、3年間準備をした。最後には、書物の知識に疑いを抱いたので、自ら進んで勉強をやめた。その後、代理教員に3か月、技師助手に3年就き、その間に研究に大いに興味をもち、すべて自身でひたすら観察を行なった。1841年から1860年の間に、家で2年過ごし、さまざまな混然とした科学を研究し、非常に深く豊かな基礎を築いた。そのほかの時間には科学雑誌のために文章を書き、あるいはエンジニアリングを研究して、しかも『経済学者』雑誌の副編集長に就いたこともある。『教育論』(任鴻雋による中国語訳がある)はその時に雑誌に発表した文章の集成本である。1858年に、改訂し、論文にし

て、全集に編集する予定であったが、にわかにアイデアが浮かび、演化論（進化論）の学説は生物学上で当てはまるだけでなく、その他の科学についてもまた同様に当てはまると考えた。そこで、かれは雑誌編纂の仕事辞して、『総合哲学』の著述に携わった。当時、生活のあてがなかったので、予約という方法でこの本を宣伝販売し、売れ行きはまだ悪くなかった。1860年には、ヨーロッパの予約者が440人あり、そのなかには極めて有名なひともあり、またアメリカにも予約者が約200人あった。『総合哲学』の第1巻の『基本原理』（*First Principles*）は1862年に出版されたが、その書は多くの英国国教会の学者の怒りに触れて、にわかに誹謗が起り、そのために多くの予約者が次々と契約破棄を求めた。スペンサーはできる範囲で、できるだけ予約者にお金を償還したが、しかし支払い切ってとうとう力尽き、もちこたえることができず、ただ暫定的に出版停止を宣告するほかなかった。1866年2月4日は、スペンサーの歴史上記念すべき日である。この日、イギリスの権威のある哲学者J. S. ミル（弥爾、厳復の訳では穆勒）がスペンサーに書簡を送って励まして、かつまた販路を広める策を講じてくれた。それからほどなくして、アメリカの読者が、かれの著作に敬意を払い、大金を贈ったので、そこでかれは奮起し、ついに生前に『総合哲学』（*System of Synthetic Philosophy, 10 vols.*）の全部を完成させた。もし当時、ミルの激励やアメリカの読者の金銭援助がなかったならば、かれの意志はすでに落胆の最高度の事態に達していて、『総合哲学』は必然的に継続して、叙述され、完成することはなく、『群学肄言』は恐らく日の目をみることができなかつただろうし、ましてや中国社会学界と関係ができなかつたであろう。

『総合哲学』という名称のもとで、次の5タイトルと10巻からなっている。その間病気および気分の落ち込みといった原因でしばしば中断したことがあるが、しかし内容はなお一貫しており、完全な進化論の見地で各種の理論を解釈している。5部の書名と巻数は以下のようである。

- 1 『基本原理』（*First principles, 1862*） 1巻
- 2 『生物学原理』（*The principles of biology, 1864-1867*） 2巻
- 3 『心理学原理』（*The principles of psychology, 1855, 第2版, 1870-1872*） 2巻
- 4 『社会学原理』（*The principles of sociology, 1876-1896*） 3巻
- 5 『倫理学原理』（*The principles of ethics, 1879-1893*） 2巻

そのなかで、社会学の方法は、分量で特殊な地位を占め、その他のどの書も超えており、社会学に対するスペンサーの重視を証するに足る。かれの著作集のなかで、社会学に関するものは、この社会学原理以外にもほかに次のものがある。

- 1 『群学肄言』（*The study of sociology, 1873*）
- 2 『社会静態論』（*Social statics, 1892*）
- 3 『記述社会学』（*Descriptive sociology, 1873-1919*） 8巻

スペンサーは1903年に亡くなった。かれの社会学上の貢献の主なものはおよそ二つある。

一つは社会有機体論の提唱であり、社会生物学派のためにしっかりした基礎を固めたことである。二つは社会学の学問上の地位を揺るぎないものにしたことである。かれ以前に、コントが社会学という名称を創ったけれども、しかしコントは社会学関係の専門書はなかった(ママ)。

いまかれの『群学肄言』を述べたい。これは中国語の最初の社会学の書である。しかし、偶然に、アメリカの大学での社会学の最初の教科書もこの『群学肄言』である。大学は耶魯(Yale)大学であり、教授はW. G. サムナー(孫姆南)で、時期は1876年から1881年までである。上述したように、スペンサーは英国国教会に反逆する色彩が非常に濃厚であったので、教会の宣教師および一般の保守的で頑固なひとの反対に遭って、嫉まれた。また、かれの書を教科書として用いることで、すぐさま大学の内外で次々と議論を引き起こした。とはいうものの、この本は1874年にはすでにアメリカで発行された書籍であったし、そのうえかれに敬意を払っているアメリカの読者は依然として少数ではなかった。

厳復訳の中国の学術上の勢いはいまになっても依然として小さくない。成立間もない東北大学で、すでに史学群学部があることは、目前のもっとも明らかな証拠である。

ただし中国社会学のはじまりは決してただこの一つの起因だけでない。一つのきっかけは直接西洋から輸入したものであるが、ところがそれ以外のものは間接的に日本からの輸入である。

1868年の明治維新は東アジアの盛事である。その時から日本はできる限り西洋文明を取り入れはじめ、このために国際間の耳目を集めた。同時に日本の国際的な地位も、それによって次第に高まった。1896年(すなわち、光緒22年)から、すでに中国政府は学生を日本留学に派遣したが、その人数は多くなかった。その後、政府の奨励を経て、加えて新しい時代の人物を羨ましく思う心理や官位が高くなり、金もちになる近道と考えられて、留学のムードが一時大々的に勢いづいた。政府のなかで考えが比較的新しい官僚は、私費留学を奨励した、そのなかの最たるのは湖廣(湖北・湖南両省)総督の張之洞であり、もっとも力を入れて呼びかけた。両江(江南省、江蘇省、安徽省)総督の劉坤一もまた似かよった意見であった。この二人の指示もあり、加えて日本は距離が近く、文字も同じで、行き来の所要時間を要せず、費用の節約などのメリットがあったので、日本留学が趨勢になり、将来の登竜門のルートと考えられた⁽⁴⁾。1901年に義和団事変の後、変法の要求がますます切実になり、あらゆる新政は至るところでひとを必要とし、情勢に明るい人は俊傑であるとされ、そこで俊傑が大挙して日本に行き、日本留学が大いに盛りあがった。1901年から1907年の間に、前後して公私費の日本留学生は1万人以上に達した。1907年11月30日、学部(全国の教育を管理する中央官署)は日本の官立高等学校のなかの中国留学生の人数について奏上して、「……近年来、わたくしらが詳細に調査したところ日本に留学した人数はすでに1万を超えているけれども、速成で学ぶ者が60%を占め、普通で学ぶ者30%、中途退学して転々として実績のない者5-6%、高校および高等専門学校に入学する者3-4%、大学に入学する者はわずかに1%である」といった。そ

のなかのいわゆる速成科は、当時、中国人のために特設された速成学校あるいは速成班を指し、課程は大体師範と法政の二つであり、修学年数はおよそ半年から3年の間である。したがって、日本留学の速成生のなかには往々にして結局日本のかな文字さえまだ完全に覚えていない者がいる。普通科は日本の尋常の小中学校であり、この普通科で学ぶ者の大体の年齢は比較的年少で、専門学校に進学しようとしているが、レベルが足りず苦しんでいる。したがって、補習を行なっている。後になって師範と法政の学生はすべて高校以上のレベルとなり、専科に進む者は目的がすべて官職に就くことなので、大部分が法政、経済などの学科に他ならなかった。

1893年、東京帝国大学はすでに社会学の講座をもっていた。5-6年後、社会学は恐らくすでに一般の学校に普及した、とくに法政学校と師範学校である。したがって、速成生のなかの少ない者が社会学の課目を学んだかもしれないが、しかしかれらがみんなこの課目を重要だとみなしたわけでない。当時、法政速成班が教えた課目は、日本の文字以外に、主要な科目は法学通論、憲法、民法、商法、刑法、訴訟法、国際法、政治学などであり、副次的な科目に行政法、地方制度、経済学、経済政策、財政学、銀行学、監獄学、警察学、社会学などがあつた。社会学は確かにいくつかの学校でも微々たる位置であり、当然さほど重要ではなかった。師範速成班の講義のなかで、時たま社会学が述べられたが、ひょっとすると副次的な科目のなかにも、社会学がすでにあつたかもしれない。

この日本への留学生は帰国後、政界、教育界で重要な地位を占めるだけでなく、文化事業面でも、確かに先駆をなした。早稲田大学漢文講義録編輯部が中国籍の学生に頼んで速成班法政科全講義を翻訳し、『早稲田大学政法理財科講義』の名称で発行した。科目は約20種あり、それぞれの巻数もそれほど大きな変わりがない。1906年春、日本留学生の熊開先、王華国、李凌雲らは『警察講義録』14冊を印刷、刊行した。同年夏、湖北・湖南省の学生楊度、羅傑、胡子清らが『法政粹編』22冊を印刷、刊行した。翌年夏、『政法述義』が出版されて、計30冊余りになり、そのなかには社会学が約80ページあつた。この翻訳された講義は一般のまだ外国に行っていない者に非常に喜んで読まれて、売れ行きも良く、日本に留学したが、日本語のレベルがそれ程高くなく悩んでいる学生も、随時参考にするためにセットで購入することがよくあつた。1911年までに、丙午社が『法政講義』（約30冊）を出版したのち、日本語が比較的流暢な日本留学生はみんな胸をなでおろして喜びあつて、講義の翻訳を発売する動きはとうとう停止した。

日本に留学した法政学生のなかで、機転の利く者は、大多数が議員、官吏などの身分を手に入れ、その他の者は各省の法政専門学校の教員に充てられた者も相当多かつた。当時の法政学校の講義は、実際には日本語の講義からの翻訳であり、残念ながら今ではすでに探すことが容易でなくなったが、もしそうでなかったら、われわれは当時教えられた科目を調べて確かめることができる。社会学は中国で、最初もしかするとこのような法政学校で教えられたかもしれ

ないが、これははっきりいいきれない。

『政法述義』が出版される前、中国はすでに日本語から重訳された1冊の社会学書があった。社会学は元来、西洋の産物であり、日本についても舶来品であり、日本語から中国語に重訳されたので、間接的な輸入といわれる。この重訳された本は、アメリカ人 F. H. ギディングズ (吉丁斯) が著した『社会化論』(The theory of socialization, 1897) であり、日本語への訳者市川源三が『社会学提綱』(1901) と改名したものを、日本留学生の呉建常が中国語に訳してそのまま採用した。中国語の訳本は1903年正月15日に発行され、『群学肄言』、『社会学原理』の両書の発行時期と隔たりにない。中国語の訳本は『教育志叢』(一種の叢書名) の第4編である、逆にいえば、そのころの日本の師範学校はすでに社会学の課程を設けていたと証明できるかもしれない。

スペンサーの例に照らして、われわれはギディングズについて簡略に少し述べておこう。ギディングズは1855年3月23日の生まれである。1877年に連合学院(ユニオン・カレッジ)で文学士の学位をえて、その後新聞記者に計11年従事した。

1888年から、Bryn Mawr (百林瑪) 学院の政治学の講師、副教授などの職に任じられ、1892年に教授に昇任した。1894年から、コロンビア大学の社会学および文明史の教授に転任し、1928年に高齢で引退した。社会化論以前に発表した著作には、J. B. Clark (克劳克) と共著の『現代分配程序』(1888年)、単著の『社会学理論』(The theory of Sociology, 1894)、『社会学原理』(The principles of sociology, 1896) の3著作がある。そのなかでも社会学原理の書で有名になり、国際的な榮譽に浴した。翻訳書の発行にはフランス、ドイツ、ロシア、日本、スペイン、イスラエル、チェコスロバキアなど89のことばがある。わが国の中国語の訳書は、労働大学編訳館が以前に北京師範大学の李未農君に訳を願ったが、まだ刊行されていない。『社会化論』は『社会学原理』に続く作品であるが、字数は多くなく、日本語訳および中国語重訳の他にも、イタリア語訳がある。それに続いて、ギディングズが刊行した重要な著作は約9冊あるが、書名は割愛する。

日本の学术界は、以前からヨーロッパを敬っているが、日本の社会学の先進的な人物遠藤隆吉は『社会化論』の日本語訳の序言のなかで、「余はかつてイギリス、アメリカ、ドイツ、フランスの諸家の説を涉獵したが、わたしはアメリカのギディングズを第1に推す」といっている。また、その著『社会学原理』を日本語に訳したことから、ギディングズは日本の社会学界に対して極めて重大な影響があったことがわかる。

呉建常訳の『社会学提綱』は字数が僅か1万数千字であるが、訳はたいへん苦心がみられるし、印刷も精巧で美しく、また印刷用紙もよい。当時、もしかすると1,2千冊の販路があったかもしれない。アメリカの社会学の書籍が中国語に訳された最初の1冊というべきである。

日本の社会学の書籍が中国語に訳された最初の1冊については、『政法述義』のなかの『社

社会学』と推測したい。この書は、もともと日本の文学博士建部遯吾の著で、原題は『理論普通社会学綱領』（1904）であるが、訳者湯一鶚はその原題が長すぎるのを嫌って、『社会学』と改めた。訳書は1907年7月15日に発行された。字数は『社会学提綱』よりやや多く、3万字以上であった。『政法述義』は全巻一括での発売であったが、『社会学』はそのなかの1部発売であったので、販路もまた『社会学提綱』より広がった。

呉建常訳の『社会学提綱』と湯一鶚訳の『社会学』は、前者は教育理論を紹介する時、関連して紹介されたもので、後者は『政法述義』の翻訳に付け加えて訳されたものである。この両書のページ数はいずれも多くなく、いずれも自覚なしに中国語に翻訳されたので、おおよそ大なり小なり誤りがないはずがない。このほかに、欧陽鈞君が述べていることによると、「有賀、浮田、岸本の三氏がいう社会学は、前後してすでに訳書がある」という。惜しいことに、われわれは現在、これらの訳書を探しだすことができないが、しかし当時日本の書籍を翻訳することが普及していることが、これらの状況からなにがしか想像できる。

1911年、欧陽鈞編訳の『社会学』が出版された。この書はほぼ遠藤隆吉の口述筆記に基づいたものである、したがってギディングズ学派の学説をたいへん高く評価している。訳書の字数は7万字以上であり、上述した日本語から呉建常と湯一鶚が翻訳した2冊の総ページを超えており、独立した単行本である。したがって、意義のうえで以前の2冊とは異なり、すでに意識的な紹介となっており、どうにか間に合わせたものではないため、われわれが信頼できるものである。この書は構成と文章の面で確かに議論すべきところがあり、研究者からも多くの批評がある。しかし、ただ当時の社会学の書籍が少ないことを思うならば、この書が毎年平均概ね1千部売れており、知識の普及上、まったく意義がないとはいえないだろう。現今なお販路を広めているけれども、かなり遺憾を感じないわけではない。

その後、遠藤氏の『近世社会学』も中国語訳の書がある、これは1920年5月15日に出版されたもので、字数は以前出版されたどの中国語の社会学書も超えており、約15-16万字と推測される。この訳書は出版がかなり遅かったが、知識の広まりのうえで、はなはだ大きな功績があった。そのうえ、この書は体系がはっきりしており、内容もまた豊富であり、よしんば現今であろうと、やはり重要な社会学の文献である。原書は1907年に日本で出版され、中国語訳は賈壽公君である。

われわれの先の時期区分の規準にしたがえば、ここでもう輸入期の社会学の締めくくりとなる。本来『近世社会学』は移植期のなかに入れるべきであるが、われわれはたったいま、遠藤の口授、欧陽君の口述筆記を述べたので、先にこの重要な訳書を述べたわけである。

三 社会学の再度の輸入と移植

キリスト教の教義を広め、効率をあげるために、宣教師たちは中国の社会組織を研究しなけ

ればならなかった。キリスト敎の敎義を広め、基盤を固めるために、敎会は学校を開設し、中国の青年信徒を受け入れた。学校開設の状況については、われわれは具体的にみることができる。ミッションスクール(敎会学校)が過去の中国の教育史上で占める地位は、公立、私立学校とまさに「鼎足而立」(三者が並び立つこと)ということができる。しかし、そのミッションスクールの課目の大部分は、それぞれ敎義の洗礼を経たものであり、社会学の課程も当然例外ではない。ミッションスクールのなかに、われわれは社会改革などの課程をみかけるが、内容は宗教の偉人の足跡を宣伝する範囲をでておらず、社会救済などの課程についてもたいていキリスト敎社会主義の立場を断つことができない。われわれはもちろん、ミッションスクールの功績を一律に否定すべきではない。たとえば、最初(1913年)に社会学の講座を開設した滬江大学はミッションスクールであり、やはりなんにんかの社会学の人材を生みだしたし、今日でもこの大学は中国の大学のなかで社会学課程が比較的完備している大学の一つである。早期の中国の高等教育史で、ミッションスクールは非常に高い地位を占めている。1913年前後、ミッションスクール以外で、さらにわれわれがうえて推測した法政学校のほかは、おそらく社会学課程はごくまれである。

1915年には、陶履恭⁵⁾と梁宇皋共著の『中国郷村與城市生活』(英文版, Liang, Yü-ko & Tao, Menghe, *Village and town life in China, 1915*, ロンドン経済政治学院の『経済政治研究叢書』の『社会学専刊』第4種)が出版された。これは中国社会を研究した本であるが、しかし最初のものではない。最初の類似した本は、アメリカの神学博士が著したものであり、著者はやはり牧師であろう。出版の時期は陶のものより16年早く、やはり19世紀に出版されたものである。著者は Arthur H. Smith (司密斯)⁶⁾で、書名は *Village life in China: a study in sociology* (1899) (中国郷村生活) であり、社会学的な研究と明記されており、これも英文である。全書は3部に分かれており、第1部は中国郷村それ自体を研究し、第2部は郷村の家庭生活を研究し、第3部は結論で、中国郷村の次の時期という題で、そのなかには1章があるだけで、タイトルはキリスト敎は中国のためになにをなすことができるかである。ここから著者がこの本を書いた動機および著者の立場がわかる。しかし郷村生活は比較的变化が緩慢であるので、一部の資料は、まるでわれわれの目の前にあるようである。

当時の宣教師たちには、中国社会を研究するひとが必ずなんにんかいた。かれらの研究の結果はもしかしたら大部分は刊行されなかったかもしれないので、探しようがない。ミッションスクールが用いた社会学のテキストも、現在究明する方法がない。しかし、これらはわれわれにキリスト敎会と初期の中国社会学の発展とは相当関係があったことを教えてくれる。ミッションスクールは社会学が最初に移植された場所である。

辛亥革命は、ただ国家の統治形態の革命であり、帝国から民国に改まったけれども、その他の一切は旧いままである。これらの批判もいくぶん理由がある。人民の生活は、辮髪を切り落とすことを除いて、確かに一切が旧いままである。一般に、人民の思想は、まだ「真命天子」

（天命を受けて即位した皇帝）を望んでいる。思想と学術を語るひとはせいぜい教育界の人物であり、辛亥革命後、時勢の流れを追うひとの大部分は官庁に進んだし、あるいは議員に就いた。学術研究は依然として旧いままで活気がなかった。

1911年から2年間の主要な定期刊行物、たとえば章士釗が編集する『独立週報』、梁啓超が編集する『庸言』、康有為が編集する『不忍』、国民党が刊行する『国民』は少し政論があるとはいうものの、学術論文は極めて少ない。1915年9月創刊の『新青年』（月刊）はそれ以前のものとはまったく異なり、画期的な刊行物である。1919年の五・四運動の前後は中国思想界の重大なキーポイントとなる刊行物が非常に多く、比較的重要なものには『星期評論』、『毎週評論』、『解放與改造』、『新潮』など多種がある。その時期の刊行物と社会学とが少し関係があったことについていえば、主要な点がほぼ2点ある。第1点は社会思想をできる限り紹介したことである。当時、新しいものはよいものであるという傾向があったようで、したがって新しい思想でさえあれば、どの流派であろうと大量に紹介された。第2点は社会問題を討論することを提唱したことである。その時期、国内の新聞でさえも附録に社会問題を討論するコラムがあった。1919年という年の中国の歴史上の意義は、政体革命の辛亥の年以上であるはずである。

多くの翻訳書の出版にともない『世界叢書』、『共学社叢書』、『尚志学会叢書』、『新智識叢書』、『新時代叢書』はすべてこの時期に次々と刊行された。そのなかで社会学については『世界叢書』のなかのC. A. エルウッド（愛爾烏徳）の『社会学及現代社会問題』（*Sociology and modern social problems*, 1919）がもっとも売れ、訳者は趙作雄君である。このほかにも、『世界叢書』のなかにはエルウッドの『社会問題』（*The social problem: a reconstructive analysis*, 1922, 趙廷為訳）、R. T. Ely（伊雷）の『社会主義與社会改良』（何飛雄訳）、H. W. Laidler（雷得萊）の『社会主義之思潮及運動』（李季訳）がある。共学社の出版がもっとも多くて、20種以上あり、社会心理学、家庭問題、労働研究、社会主義などがそれぞれ若干冊を占めている。そのなかでは易家鉞の編著を除いて、その他はいずれも訳書である。ギルド社会主義については着実に述べられており、G. D. H. コール（柯爾）一人の著作も訳が5, 6種類の多きに至っている。尚志学会叢書のなかには、G. ル・ボン（黎明）の『群衆心理』（*Psychologie des foules*, 1895, 呉旭初訳）、陳長蘅の『中国人口論』もあり、すべて話題にする価値がある。『新智識叢書』は人口、家庭、財産、労働、合作についてすべてで1, 2冊の編著あるいは翻訳があるが、どれも通俗的な叢書である。『新時代叢書』はただ李達らが日本語から訳した女性問題の書籍が数冊あるだけだが、もし女性問題を一つの重要な社会問題と考えるならば、『新時代叢書』の存在も無駄ではなかった。中華書局もこの期間中に、2部の社会問題を出版したが、いずれも日本語から翻訳したものである。B. A. W. ラッセル（羅素）の『社会改造原理』（*Principles of social reconstruction*, 1916）もこの時期に王雲五君によって翻訳がなり、公民書局が出版した。J. S. マッケンジー（麦鏗齊）の『社会哲学原論』（*An*

introduction to social philosophy, 1890) も中国語に訳された。

一般社会および授業科目の必要から、テキストとしての社会学概論の出版が非常に多かった。一時、アメリカの大学の初年クラスのテキストはすべて中国のテキストになった。イリノイ (意利諾) 大学の E. C. ヘイズ (海夷史) 教授の『社会学導言』は、曹聚仁 (ママ、曹源文か)、朱源文 (ママ、朱聚仁か) の二人によって『社会学大綱』(1927) としてダイジェスト編集された。F. W. Blackmar (白来克瑪) 教授の『社会学原論』は陶樂勤君によって『社会学原理』として訳され、出版された。E. S. ボガーダス (鮑格度斯) の『社会学概論』(*Introduction to sociology*, 1922) は瞿世英君によって訳され、出版された。編著のものも少なくなかった。たとえば常乃徳の『社会学要旨』、王平陵の『社会学大綱』、世界書局の『社会学入門』、楊幼炯の『社会学述要』等々がある。

学校の方では、まず大学から述べると、滬江大学の文科のなかにあった社会科学を除いて、基礎がまだしっかりしていない私立大学、とりわけ北京、上海の両地域にある大学は、学生を引き寄せる見地から少なからず社会学課程を設置した。上海の南方大学は一つの明らかな例といえよう。基礎が比較的安定した大学、たとえば復旦大学、大同大学などは時代の潮流に逆らえず、その時期までに 1, 2 の課程を設置したし、ある大学は政治学部のなかに、またある大学は経済学部のなかに社会学課程を付設した。いうまでもなく、教授は政治学部あるいは経済学部の教師によって兼任された。当時、社会学の人材は希少であったために、およそ政治、経済、教育、心理などを学んだ者は社会学教師を担当する資格をもっていた。社会学は舶来品であったので、手厳しくいうと、なんにんかの社会学教師はただほんの少しいつの外国語がわかるにすぎず、かれらが担当する職務は教師ではなく、実際は翻訳者であった。

私立大学のなかで、最初に社会学部を開設したのは恐らく厦門大学があげられるが、これは時代の産物である。教授兼主任はアメリカのコロンビア (哥崙比亞) 大学に留学した哲学博士の徐聲金、講師はアメリカに留学した林幽である。1921 年の創立後、まもなく学校の専制が度を越したので、多くの学生は上海にやってきて別に大夏大学を組織した。したがって、この学部の功績は学生が散り散りになったために、厦門一帯の教育界を除いて、見当たらない。

燕京大学は、現在中国社会学界の重鎮であることは言を俟たない。しかし、その当時、この大学はむしろ大きな名声はなかった。当時の教会大学のなかの社会学部のリーダーは滬江大学があげられるだろう。1921 年から、アメリカのブラウン (勃朗) 大学が、滬江大学に社会学講座を設置した。訪中して授業した教授は、前後して J. Q. Dealey (狄雷) 博士、Daniel H. Kulp II (葛学溥)、H. S. Bucklin (白克令) ら多くのひとがある。大部分のひとはすでにアメリカで教授の地位があるので、中国の教会大学の一般の教授より優れている。また Kulp II は楊樹浦地域 (すなわち、滬江大学の所在地付近) で滬東公社⁽⁷⁾を創設し、労働者子弟学校、補習学校などを開設した、これは後の滬江大学生の社会行政の実習場所である。H. S. Bucklin が指導した沈家行調査は、どんな重要な発見もなかったが、中国の社会調査運動の先

駆けになった。

中等教育については、高級中学はほとんど社会学あるいは社会問題の選択課程を設けていたし、各学校の刊行物によれば選択する人数は一般の科目より多い。筆者の知るところでは、大学の社会学部に進学する学生の3分の1以上は、かつて高級中学で社会学あるいは社会問題といった類の課程を学んだことがあった。

1922年に成立した中国社会学会は五・四時期の余波と考えることができ、余天休によって主宰された⁽⁸⁾。力量が不十分のために、この学会の刊行物『社会学雑誌』(*The Chinese Journal of Sociology*)を維持することが第2巻までで無理になり、閲読者も多くないために出版者も刊行を続けることに頓着しなかった。この雑誌の資料は整っておらず、とりたてて大きな貢献はなかった。第3巻はかつて余天休が主宰する西安中山大学によって1期刊行されたが、ページ数はわずか数10ページであり、贈呈用の刊行物となった。近ごろの話では、山東の齊魯大学から改めて出版され、間もなくまた読者が目にすると思うが、残念ながら主要な著述者が非常に少なく、前途はなお少なからぬ困難がある⁽⁹⁾。

四 中国の社会学研究の萌芽

五・三〇運動後、中国の社会科学研究の風潮はすこぶる高まった。国外で社会学を研鑽した学生も次第に帰国し、萌芽期の形勢がここにおいて形成された。復旦大学は1925年に社会学部を開設した。同じ時に持志大学も専攻科を開設したが、ただすぐに途中で失敗した。翌年、光華大学、大夏大学のいずれも社会学部を開設した。1927年に中央大学、暨南大学、1928年に清華大学、東北大学、1929年に労働大学、開封中山大学も先後していずれも専攻科を開設した。

目下、国内の大学の人文・社会科学系の学科は、ごく少数の例外を除いて、すでにいずれも社会学の課程を開設した。成都大学、安徽大学、福建の協和大学、広州の中山大学、中国公学などがすべて相当する課程を設置した。また法政学院もほぼ同じ課程を設置した。上海法学院、上海法政学院などもすべてそうである。他には商工科系の大学、たとえば東北交通大学、中央大学商学院などもまた社会学の課程を設けた。

ミッションスクールは中国の高等教育史上、もともと重要な位置を占めていた。この期間内に、社会学の専攻科を開設したのは、金陵大学、齊魯大学などがある。一つあるいはそれ以上の社会学課程を開設したのは、嶺南大学、約翰大学、金陵女子大学、東呉大学などである。一課程を開設したのは、之江、華中、協和などの大学である。

国立大学のなかで、社会学部を開設したのは、中央大学、暨南大学、清華大学、労働大学などである。北平師範大学も社会学部を開設すると聞いた。武漢大学も、中央政府が武漢にあった時代に、社会学部を開設したし、浙江大学はまもなく人類学・社会学部を開設しようとして

現在準備中であると聞く。

萌芽期の状況からいえば、中国の社会学界はおよそ三つの派に分けることができる。第1派は文化学派であり、史学社会学部および人類社会学部などがいずれも属する。第2派は社会行政学派であり、実際に社会を救済する人材を訓練することを主旨としており、ミッション系大学が多く属する。第3派は唯物学派であり、私立のなかの非常に多くが属しており、公立大学にもある。

教授の人選からいうと、目下アメリカ留学をした者が比較的多くを占めており、人材もまた比較的多い⁽¹⁰⁾。アメリカ留学のなかで、とりわけコロンビア大学およびシカゴ(支加哥)大学の出身者が多い。コロンビア大学出身者には、陳達、黄凌霜、徐聲金、高廷梓、呉文藻らがいる。シカゴ大学出身者には、呉景超、王濟昌、游嘉徳らがいる。これ以外にアメリカ留学で社会学を学び、かつ現在社会学界ですでに相当の地位がある者には、孫本文、許仕廉、應成一、楊開道、呉澤霖、錢振亜、劉強らがいる。イギリス留学者には、陶履恭(陶孟和)らがいる。ドイツ留学者には、俞頌華らがいる。フランス、ベルギー留学者には、葉法無、許徳衍、胡鑑民らがいる。日本留学者には、李劍華、何畏らがいる。自国の大学の社会学部の卒業生は、前後して約200余名であり、そのうちミッションスクールの卒業生の非常に多くは、教会に勤めており、その他は中学・高校で仕事に就くものが多い。

教授の人選は常に変更があり、教授の専門的知識も異なっている。したがって、中国の大学本科の社会学課程はややもすると西洋の各国が開設している3,4倍以上である。現在、復旦大学がここ5年来に設置した社会学課程は以下のようである。1. 社会学大綱, 2. 社会問題, 3. 社会心理学, 4. 社会起源, 5. 人口問題, 6. 家庭問題, 7. 郷村社会学, 8. 都市社会学, 9. 教育社会学, 10. 社会理想, 11. 社会経済, 12. ソーシャル・ワーク(社会工作), 13. 社会思想史, 14. 社会学史, 15. 犯罪社会学, 16. 人類学, 17. 優生学, 18. 社会学原理, 19. 社会統計, 20. 社会調査, 21. 社会倫理, 22. 社会哲学, 23. 社会進化, 24. 社会変遷, 25. 中国社会思想史, 26. 法律社会学, 27. 新聞(報章)社会学, 28. 社会研究方法, 29. 社会政策, 30. 労働問題, 31. 労働運動史, 32. 労働者研究方法, 33. 社会価値, 34. 領袖(指導者)術, 35. 集団間コンフリクト(団体衝突)である。もしかしたらまだ遺漏があるかもしれない。ただ実際に開講されたこの35科目だけからいえば、本科のなかにこれほど多くの課程があったことはもはや驚かされる。前後して、この大学の社会学部で教員を務めたひとは、應成一、陳萱、郎醒石、孫本文、楊開道、錢慰宗、陳欽仁、李劍華、蕭遠、袁錦昌、潘光旦、王濟昌、賀良、范定九、傅若愚、蔡毓聰、毛起鷄らである。

その他の専門学科を設置した学校が、前後して課程を開設したところも20以上ある。課程のたびたびの変更および教授の生活の不安定さは、教授たちの時間が、教職および教材を探すことに潰されて困っており、これが原因となって専門的な貢献もあまりなかった。

社会調査運動がこの時期、大きな地位を占めていた。社会調査の専門家の李景漢先生はかつ

て『社会学界』の第1巻（1927年6月刊）に、「中国社会調査運動」（pp.79-100）という論文を発表した。そのなかで、中国社会調査の発展について、きわめて簡明に述べられており、ここで引用すれば次のようである。「1914-15年の間に、北京社会実進会が簡単な調査票（問題表）を用いて、302名の人力車夫の生活状態を調査した。19176年に、清華学校教授 C. G. Dittmer（狄瑪）がこの学校の学生を指導して、北京の西部郊外で住民 195 戸の生活費を調査した。1918-1919年の間に、中国北部で S. D. Gamble（甘博爾）先生と燕京大学教授 J. S. バージェス（歩濟時）らが、アメリカの春田調査⁽¹⁾に倣って北京を調査した。調査の結果は、1921年に英文で発表され、そのなかは歴史、地理、行政機関、人口、健康、経済、娯楽、娼妓、貧困、救済、宗教などの項目に分かれていた。この書は収集した資料をどのようにして統計的な方法で整理したかを示すばかりでなく、わが国の各機関がだした統計の欠如や信頼ができないかを明らかにした。同じ時期に、中国の南部で滬江大学教授 D. H. Kulp II（葛学博）が学生を指導し、広州の潮州で人口 650 人以上の鳳凰村を調査した。地勢、人口、健康、種族、経済、管理、風俗、団体、教育、美術、娯楽、宗教などの状態について、すべて詳細な分析がある。1925年に英文で出版された。この書はひとに中国の郷村社会を研究する方法を十分に示すことができた。1922年に、華洋義賑救済総会が C. B. Malone（馬倫）、J. B. Tayler（載樂仁）らの教授に 9 大学の 61 名の学生を指導して、分担作業で直隸（河北）、山東、江蘇、安徽、浙江などの省の 240 か村を調査するように頼んだ。この調査は県、村および家庭の 3 種類の調査票を用いて、農民の生活を重要視した。1922年に、金陵大学農科教授の J. L. Buck（巴克）がかれの学生を指導し、安徽蕪湖付近で 102 の田畑の状況、とくに地主（田主）および小作（佃戸）の年間の収支を重要視した調査をした。同じ時、ならびに 1923年に、J. L. Buck 教授は別の学生を指導し、非常に詳細な調査票を用いて直隸の塩山県で 150 の田畑の経済的、社会的状況の調査をした。調査の結果は、昨年英文で発表された。田庄（官僚・地主が農村で所有していた田畑や荘園）の大小、耕作状況、農産物の数量、販売方法などの項目について、すべて詳細な統計がある。この本は、中国の農家の調査のなかでもっともいい報告といえる。1923年に滬江大学教授 H. S. Bucklin が当校の社会調査クラスの学生を指導し、上海近郊の沈家行の農村を調査した。宗教、行政、懲罰、教育、農工商業、健康、娯楽、居住などの項目について、すべて簡略な調査である。同じ時に、T. C. Blaisdell（包立德）、朱積権らが北京で絨毯労働者の生活を調査した。1923年の冬季、清華学校の陳達教授が学生を指導し、生活費の調査を行なった。この学校の近隣の成府村で 91 家族、安徽休寧県で 56 家族、また当学校の雇役（人夫）141 人を調査した。1924年と 25年の間に、S. D. Gamble 先生と著者（李景漢）は 1,000 人の人力車夫、200 か所の賃貸人力車工場、100 人の車夫の家庭を調査した。1926年の春、孟天培と S. D. Gamble 先生が 25 年来の北京の物価、賃金および生活費を調査した。1926年と 1927年に、S. D. Gamble、張秉衡および著者（李景漢）がこの 100 年来の北京の物価、賃金および為替を調査した。同時にまた、北京の商店および労働者の同業

者団体の状況を調査した」⁽¹²⁾。この李景漢の論文は1927年に発表されたものであるので、データはここで終わっており、この論述のなかで去年とは1926年を指す。

各地の大学、中学・高校はこの期間に、社会調査の試行が極めて多かったが、その具体的な報告はわずかに中央大学、区立民衆教育院、燕京大学、労働大学など数校にすぎない。調査方法の方面で、この期間に出版されたのは拙著の『社会調査之原理及方法』、樊弘の『社会調査方法』、黄桔桐の『農村調査』、楊開道の『農村調査』など4,5冊である。言心哲先生が編集した『社会調査』の講演稿は部厚く、各方面の資料がとくに完備している。李景漢先生が英文で発表されたものは、北京調査および華洋義賑救済会の調査の二つはページ数がとても多いので敢えて訳すひとがないが、それ以外の大部分はすでに中国語訳がある。天津の南開大学社会経済委員会が作成した華北物価指数、上海の財政部駐滬調査価格局が作成した上海物価指数、上海特別市社会局が作成した上海労働者統計はどれも貴重な資料に満ちている。立法院統計所が発行した『統計月報』は、社会学の研究に大いに益するところがある。調査価格局は、現在すでに財政部の国定租税委員会と合併し、最近『上海生活費指数』の小冊子が出版され、とても価値があるものである。

各大学の社会学部の刊行物のなかでは、燕京大学社会学会が出版する『社会学界』(*THE SOCIOLOGICAL WORLD*)を第1位に推したい。この刊は年刊であり、1927年に創刊し、いままでに第4巻まで刊行され、内容はすこぶる充実している。復旦大学は今年度から、『復旦社会学系半月刊』を創刊した。執筆者は社会学部の教員、卒業生および同学部の関係者であり、いままでに第5期まで出版されているが、ページ数が多くないために、まだ大きな貢献はない。

光華大学社会学部も刊行物を出版したことがあるが、後に経済的に困難になったために、恐らくすでに停刊したであろう。中央大学社会学部はかつて当校の『半月刊』第1巻第14期の紙面を利用して、『社会学専号』(社会学特集号)を発行したことがある。最近、労働大学社会学部も『労大月刊』第2巻第1期の紙面を利用して『社会学専号』(社会学特集号)を発行した。その他の独立した刊行物をもたない大学は、社会学部の学生の選集が大概校内の刊行物で重要な位置を占めている。だが、時には中身がないことを免れず、学外のひとから「牛皮学」(法螺を吹く学問)とあざけられることもある。この点について、みなさんの整理を期待する。

学校の刊行物には一つの特徴がある、すなわち編集者が通常学校内に限られているので、見解が比較的狭くなるのがどうしても避けがたい。学会の刊行物は、全国の専門家の著述を刊行し、価値は当然比較的高い。余天休が主宰した中国社会学会は、すでに自然と中断し、刊行物の『社会学雑誌』も1926年(ママ)に停刊した。社会学の学術団体の中断は約3年になる。1928年9月6日、上海の各大学の社会学の教授孫本文、呉澤霖らが集会を開き、そこで東南社会学会の創設を呼びかけ、同年10月29日に正式に成立を宣言した⁽¹³⁾。1929年7月、季刊『社会学刊』第1期が創刊された。1929年秋、東南社会学会の孫本文、呉景超、呉澤霖ら

は北平（北京）の陶孟和、許仕廉、東北の劉強らと連絡をとり、全国規模の社会学会を組織することを発起した。

1930年2月8日、上海で正式に成立して中国社会学社と命名した。『社会学刊』は第2巻から中国社会学社による編纂に変わった。

この期間に、西洋の重要な社会学書籍が中国語に訳されたのは数10種になる。著述もはなはだ多く、そのなかの孫本文先生主編の『社会学叢書』は全14冊で、もっとも系統的である。楊開道先生主編の『農村生活叢書』も10冊余りで、特徴からいえばやや専門的である。

国内の農村社会学研究はなお進展しており、農学院のなかに専科を設置することがよくあり、中央大学も浙江大学もいずれもすでに設置している。近ごろの話では、中央大学がすでにこの学部を廃止したそうであり、はなはだ残念である。

五 学術建設の開始

大学教授は生活が不安定であるため、事実上規模の比較的大きな研究を行なうことができない。したがって、われわれは一人か二人の著名な教授に任せるより、むしろ学術団体に学術建設を任せるほうがいい。学術は国境のないものであるけれども、一国の学術がまず一度外国人の仕事の整理を経てから、はじめて応用ができるようになるのは、これではどうみても民族の光栄といえないだろう。

学術建設がはじまった時期、社会学の分野に、われわれはこの建設に責任を負うことができる二つの学術団体をみいだした。一つは中華教育文化基金理事会社会調査部から改名した北平社会調査所で、もう一つは国立中央研究院社会科学研究部社会学組である。

1926年2月に、中華教育文化基金理事会はアメリカのニューヨークの社会宗教研究院から通知書を受けた。その通知内容は特別支出金を寄贈する予定であること、3年を期限とし社会調査の費用を提供すること、人事行政についてはすべて理事会が責任をもって行なうこと、ということである。間もなくして、基金会は理事会の例会を経て、引き受けることを決定し、社会調査部を興すことを決定した。同年7月1日、社会調査部は成立を宣言し、理事会幹事部に付設され、陶孟和と李景漢の両先生が主宰した。1929年6月に期限がくる。理事会はすでに相当な成果があったので、大会ではもともとの活動を継続し、また活動の拡充をはかるために、この社会調査部を社会調査所に改組して、理事会によって直接活動を行なうことを決定した。この社会調査所が行なった調査活動は非常に多く、独自に行なっているまでに達成したものには、1. 北平手工業労働者500家族調査、2. 北平旧式手芸労働者調査、3. 北平労働者および小学校教員生計調査、4. 塘沽工場労働者生計調査、5. 平西農村100家族調査、6. 河北省綿花販運調査などがある。天津の南開大学社会経済研究委員会と共同で行なったものには、天津の労働者200家族生計調査と天津の絨毯工場調査の二つがある。調査価格局と

共同で行なったものには、上海紡績工場労働者250家族生計調査がある。進行中の調査には、1. 北平小売物価調査、2. 北寧路労働者調査、3. 平漢路労働者調査などがある。すでに出版された中国語の書籍は9種で、ページ数は『中国労働年鑑』がもっとも多く、資料も非常に豊富である。研究方法では、『北平郊外之郷村家庭』の貢献が比較的大きい。英文版ではすでに4種が出版されており、陶履恭の『北平生活状況』、楊西孟(錫茂?ママ)の『北平生活費指数』の両書が比較的価値がある。このほかにまだ、印刷中や印刷をまっている著作も多くあるし、定期刊行物が3種ある。一つは『北平生活費指数月報』で、中国語版と英文版である。もう一つは『北平社会科学雑誌』で中国語版季刊の学術的な専門刊行物で、すでに4期が出版されている。両者はいずれも北平南長街東河沿6号の社会調査所から直接発行されている。これ以外にまだ、『社会研究月刊』があり、天津大公報の付録として発行されている。

中央研究院社会科学研究所社会学組の方面については、以前、陳翰笙、王濟昌両先生によって主宰されていたが、王先生はすでに本年院を離職したので、現在すべて陳翰笙先生によって主宰されている。したがって、この組はすでに特集号第1種『黑竜江流域の農民與地主』、論文集第1種『畝的差異』、第2種『難民的東北流亡』を出版しているが、すべて陳先生の署名がある。王濟昌先生が主宰した都市研究は上海を研究対象にした特集号があるが、これは上海の社会的背景を題材としたものである。

この書は、本年2月にすでに印刷が終わっていたが、著者は当時時間の関係で、ただ慌しく少し原稿を読んだだけで、近いうちに出版されると思った。仔細に読む機会があると思ったが、思いがけずほどなく王先生が職を辞し、この書の広告がすでにあっただけども、結局のところ購入する方法がなかった。この書が刊行されなかったことは、研究院の数千円の経費はとうとう完全に無駄になったことに等しい。また、1929年9月から1930年2月末までに、王先生の指導によって40人余りの調査員が楊樹浦の労働者の生活を調査した。この社会学組の1929年から1930年の活動報告は、現在すでにこの調査が入手した材料をこの研究所の経済学組に計画的な整理を依頼しており、出版報告がまたれる。次年度、社会学組は中国農村経済の調査研究に携わる予定であり、以前の出版された研究の緻密さからみて、わたしは社会学班がほどなく中国農村社会研究上に重大な発見と貢献が必ずあると深く信じている。しかし、わたしは同時に都市問題の詳細な研究もゆるがせにはならないと思っている。工場所在地は大部分都市にあり、また労働者問題は目下最大の社会問題である。この社会学組は全国の社会学界に対して重大な使命を負っており、もし余力が及ぶならば、率先して研究すべきである。この社会学組の日常的な執務部門は上海のフランス租界の福開森路にある。

この北平社会調査所と中央研究院社会科学研究所の仕事およびその仕事の趨勢を総合的にみると、両機関の社会問題に対する態度はいずれも経済的要素をきわめて重視している。研究の主旨は全国の労働者・農民階級の生活を完全に理解することにある。両機関の主催者には科学的態度をつねに留意し、かつ励んでもらうことをあえて願う。両機関がすでに出版した各刊行

物は、学術上の地位はまだはっきりと確認できないけれども、数年後、すべての成果が逐次公開されれば、疑いなく両機関はいずれも学術建設上の主要機関になれる、これはわれわれがあえて予言することである。

同時に、大学教授は1国の学術を広め、研究する使命を負っており、浪費がないように時間をできるだけ節約し、可能な範囲で、各種の調査事業を提唱、指導に努力し、科学の研究の種を多く蒔くように努力しなければならない。学術建設上の時間内に、大学教授はさらに重大な任務がある。かれは各国の社会学説および社会制度を紹介、ならびに論評しなければならないだけでなく、また中国の社会学説および現有の各種制度を整理ならびに探究しなければならない。かれは中国の社会現象を解釈するだけでなく、そのうえこれは決して短時間で建てることのできないけれども、全体的な体系を樹立する努力をしなければならない。

10, 20年後、著者は社会学の発展史上に社会学が盛んになる時期が増えるよう希望する。さらにこの希望は希望だけに留まらないように望む。

民国19年（1930）12月10日

〔注〕以下の注はすべて訳者（星）によるものである。

- (1) 中国への社会学の伝播と日本との関係について、中国社会学史の著書、論文のほとんどが実際に、たとえば日本への留学生、日本語の社会学という名称の普及、日本の社会学書の翻訳などの事実をあげて言及している。一方、日本との関係についてまったく触れていない著作もある。劉少傑は、中国の社会学の創始者を康有為と嚴復の二人とし、康は中国の学術の伝統を根拠にして社会学を展開し、嚴は西洋の社会学の導入をととして社会学思想、理論の普及を推進したというが（pp.1-5）、しかし、全書をととして日本ないし日本の社会学との関係についてはまったく記述がない（劉少傑、2007、『中国社会学的發展と展開』、中国人民大学出版社）。
- (2) 中国社会学の發展の歴史区分を行なった社会学者の論述は少なくないが、ここに翻訳した蔡毓聰を含めて次のようなものがある。
 - ① 李劍華、1930、『社会学史綱』、上海世界書局。李劍華は、社会学が中国へ伝わったのは嚴復がスペンサーの *The Study of Sociology* を『群学肄言』として上海文明編訳書局から翻訳出版した年であるという（p.4, p.123）、またいわゆる科学としての社会学は、結局のところ西洋のものである（p.123）、中国社会学の發展は民国8（1919）年の五・四運動をもって重要な時期とすべきである（p.124）という。韓明謨は、李劍華のこの著書が中国社会学史の時代区分を中国でもっとも早く行なったとしている（韓明謨著、1987、天津人民出版社、星明訳、2005、『中国社会学史』、行路社、p.24）。
 - ② 蔡毓聰、1931、『中国社会学發展史上の四個時期』、『社会学刊』、第2巻第3期、中国社会学社、pp.1-33。
 - ③ 楊堃、『社会学大綱』、北京大学法学院講義、1941-42年学年（ただし、原資料は入手困難なので、韓明謨著・星明訳、前掲書、pp.24-25を参照した）。
 - ④ 孫本文、1932、『中国社会学之過去現在及将来—中国社会学社第一次年会演詞—』、『中国人口問題』、世界書局（ただし、原資料は入手困難なので、陳樹徳・許妙發編、1986、『中国社会学史資料選編』（上冊）、上海大学文学院、pp.197-212を参照した）。
 - ⑤ 龍冠海、1968、『社会学』（第四版）、三民書局、pp.379-394。
 - ⑥ Wong Siu-lun（黄紹倫）、1979、*Sociology and Socialism in Contemporary China*, Routledge and Kegan Paul, pp.4-36。
 - ⑦ 韓明謨・星明訳、前掲書、pp.23

- 28. ⑧ 胡鴻保, 1987, 「中国社会学の發展過程」, 鄭杭生主編『社会学概論新編』, 中国人民大学出版社, pp.541-586. ⑨ 楊雅彬, 1987, 『中国社会学史』, 山東人民出版社。楊雅彬はこの『中国社会学史』で, 1. 社会学の伝来 (1919年以前), 2. 中国での社会学の普及 (1919-1927年), 3. 中国での社会学の成長 (1927-1937年), 4. 中国社会学の建設時期 (1937-1949年) に区分して, その区分にしたがって全書を論述している。しかし, 民国期末で攔筆し, 1949年の新中国の建国後については論じていない。⑩ 楊雅彬・王康共著, 1991, 「中国社会学史」, 『中国大百科全書 (社会学)』, 中国大百科全書出版社, pp.489-497。この論述は楊雅彬が民国期を, 王康が新中国の建国後を分担執筆している。そこでは, 19世紀末から1980年代までの区分を大きく三つの段階に, そしてその段階のなかを前期と後期の二つに区分している。すなわち, 第1段階: 中国での社会学の普及 (19世紀末-1929) 1919年を境にして前期は伝来期, 後期は普及期, 第2段階: 中国社会学の建設 (1930-1949) 1937年を境にして前期は成長期, 後期は建設期, 第3段階: 中国社会学の調整と再建 (1950-1989) 1979年を境にして前期は調整と停滞期, 後期は再建期である。⑪ 劉緒胎の区分は, 陳樹徳, 1989, 「近年来中国社会学史研究概述」, 中国社会科学院社会学研究所編『中国社会学年鑑一九七九—一九八九』, 中国大百科出版社, p.89を参照した。⑫ 龐樹奇, 龐樹奇の区分は, 陳樹徳, 1989, 同上, p.89を参照した。⑬ 陳樹徳, 1989, 同上, p.90. ⑭ 陳樹徳・許妙発, 1986, 『中国社会学史資料選編 (上冊・下冊)』, 上海大学文学院。⑮ 張琢, 1992, 『中国社会和社会学百年史』, 中華書局 (香港)。この書の一部は張琢・張萍著, 2019, 星明訳, 2019, 『中国の近代化と社会学史』, ミネルヴァ書房に再録されている。とくに, 第1章清朝末期の維新と社会学, 第2章辛亥革命から「五・四運動」まで, 第3章「五・四運動」後の30年, 第4章共和国成立後の30年, 第5章近代化の新時代, 第9章中国社会学史の研究を参照された。⑯ 袁方主編, 1999, 『社会学百年』, 北京出版社。⑰ 楊雅彬, 2001, 『近代中国社会学』 (上, 下冊), 2010, 『近代中国社会学 (増訂版)』 (上, 下冊), 中国社会科学出版社。楊雅彬はこの『近代中国社会学 (増訂版)』で, 前著の『中国社会学史』 (1987) の区分より, また王康との前共著論文 (1991) より新たにかつ詳細に次のように論じている。すなわち, 近代中国社会学を1930年の中国社会学社の設立を指標にして, それ以前は社会学の伝来と普及の段階, それ以後は社会学の成長と社会学の中国化の時期とに大きく二つの時期に分けている。さらに伝来と普及の段階を19世紀末から20世紀はじめまでの伝来時期と1919年から1930年までの普及の時期との二つに細分している。成長と社会学の中国化の時期については, 1930年から1937年までを社会学の發展繁榮の時期, 1937年から1949年までを社会学の中国化の提唱の時期としている (増訂版前書き, pp.3-4)。なお, 楊雅彬は前著の『中国社会学史』 (1987) と同様, 本書でも民国期末で攔筆し, 1949年以後の社会学については論じていない。1979年の中国での社会学の再建, 回復後, 『近代中国社会学 (増訂版)』の出版までに, すでに約30年が経過していたし, その間には大学での社会学部の廃止, 社会学の教育・研究の禁止, 反右派闘争期の社会学と社会学者に対する批判などの大きなできごとがあったので, それらについての論述を筆者は期待していた。⑱ 黄紹倫, 1992, 「社会学的中国化」, 李明堃・黄紹倫主編『社会学新論』, 商務印書館 (香港), pp.59-68. ⑲ 韓明謨, 2002, 『20世紀百年学案・社会学卷』, 陝西人民教育出版社, pp.9-14.
- (3) この記述は正確ではない。実際は中国で社会学の最初の本は, 章炳麟 (太炎) が日本の岸本能武太の『社会学』を1902年に翻訳, 出版したものが最初である。岸本能武太著 (1900, 大日本図書)・章炳麟 (太炎) 訳 (1902, 上海広智書局)。
- (4) 清朝末期から民国末期までの日本への留学生については, 拙著『中国社会学史の研究』 (2021, 行路社) の「社会学にみる日本と中国の関係について—清朝末期から民国末期までを中心に—」 (pp.2-30) を参照されたい。そこでは, sociology の日本語訳である社会学という名称の輸入, 日本への留学生急増の社会的背景, 社会学部教授の日本留学経験者, 日本留学者の社会学関連図書の著作および翻訳書などについて言及している。

- (5) 陶履恭は陶孟和ともいう。かれは東京高等師範学校で2,3年学んだ後、帰国し改めてロンドン・スクール・オブ・エコノミクスに留学し、L. T. ホップハウスやE. A. ウェスターマークから社会学を学んだ（韓明謨著・星明訳、前掲書、p.58。楊雅彬、2010、前掲書（増訂版 上冊）、pp.67-68）。楊雅彬によれば、陶孟和と梁宇皋は同時期にロンドン・スクール・オブ・エコノミクスに留学しており、二人ともL. T. ホップハウスとE. A. ウェスターマークから社会学を学んだ（楊雅彬、2010、同上、p.67）。陶履恭（陶孟和）は官費留学生として、最初東京高等師範学校に1906年から1910年まで留学し、その後1910年から1913年までロンドン大学経済政治学院に留学し、そこで経済学博士の学位を獲得している（百度文庫から引用：<https://wenku.baidu.com>）。
- (6) Smith, Artur H. は、阿瑟・史密斯、明恩溥とも表記される。
- (7) 滬東公社の活動については、滬江大学を卒業し、当時この公社の活動に従事した華東師範大学の励天予教授夫妻からの聴き取りなどをもとにして述べたことがある（星明、1995、「付論 滬江大学付属滬東公社の活動について」、『中国と台湾の社会学史』、行路社、pp.69-72を参照されたい）。
- (8) この社会学雑誌およびそれを主宰した余天休についての韓明謨は次のように述べている。
 「……1922年2月、留学から帰国した余天休が北京で「中国社会学会」を組織し、同時に『社会学雑誌』を創刊し、上海商務印書館から出版した。余天休は20年代の中国の社会学の草創期にかなり活躍した人物である。かれが結成した中国社会学会は、実際にはごく少数のメンバーがいたにすぎなかった。かれが創刊した『社会学雑誌』は、実際にはかれ一人によって編集されていた。かれは北京にいる時、東方大学を設立し、辺境地域を殖産する人材を養成した。1930年、西安に行き中山大学を開設し、学長になり、間もなくまた齊魯大学の教授になった。かれが創刊した『社会学雑誌』は隔月刊であり、最初の2巻は北京で発行された（上海商務印書館からの出版）。全部で8冊刊行され、期間は1922年3月から1925年8月であり、第3巻は1930年になって、余本人が北京から西安に移ったことにより西安で、また第4巻はかれが済南に移ったことにより済南で発行された。1932年11月に、第5巻4号で打ち切られたが、前後して11年、時間は相当長きにわたったが、社会学の発展にとって、価値ある論文をだしたかという点、その後にはだされた社会学の刊行物には及ばなかった。余天休本人は前後して15冊の著作があると吹聴したが、初期の中国の社会学界でいささかの地位ももっていない。余天休の思想は、『社会学雑誌』の第1巻第1号でみると、その冒頭に要点が次のように述べられている。『現在、多くのひとが外国のものを中国に取り入れているが、一切合切をうのみにしており、少しも研究を加えない。これは中国のもっとも不幸なことである。また、多くのひとが中国の社会情勢に対しても注意を払っていない。研究の側面からも分析を加える技量がなく、意外にも『社会主義』、『労農主義』、『工団主義』、『共産主義』、『無政府主義』および『職業組合主義』等々といったような各種の主義に見分けがつかなかった。……一種の「中国主義」(Chinaism)を生みださねばならない」と。ここからわかるように、余天休は社会主義、共産主義には反対であった。この思想は、五・四運動以後の中国では遅れたものである。同時に、余天休本人にはどんな高い水準の著作もない。したがって、かれは初期の社会学界で活躍したけれども、その影響はさして大きくなかった」。余天休に対する韓明謨の評価は決して高くないけれども、鄭杭生・李迎生は「……余天休はわが国で社会学の研究を提唱したもっとも初期の一人であり、……中国の初期の社会学の発展に一定の貢献をした……」と、また「余天休が組織した中国社会学会は当時の政治的圧力およびかれ自身の原因によって行き詰まった後、中国の社会学界は再び共同研究機構のない状況となった。余が組織した社会学会は意義という点からみれば有名無実だけれども、はじめからおわりまで決して社会学者に影響を与えなかったわけではない」と余天休とかれの主宰した中国社会学会に対して一定の評価をしている。実際、中国社会学史の著書をもつ楊雅彬も「1920年初期の中国の社会学界は、実力はいまだかなり弱かったし、加えて当時の北京政府の要人たちは社会学を社会主義だと誤って考えて大きな干渉を加えた。新たに成立した中国社会学会は歩みが困難であった。出版経費も足りず、読者も非常に少ない。学会のさまざまな

活動は最終的には中止あるいは中途にならざるをえなかった。しかし、中国社会学会と余天休が中国の社会学の活動を進めるために行なった努力はやはり肯定されるべきである」と評価している(韓明謨著 1987・星明訳 2005, 『中国社会学史』, 行路社, p.84)。また、余天休に対する楊雅彬や鄭杭生・李迎生による評価については、拙著, 2021, 前掲書, pp.46-47を参照されたい。

- (9) 中国社会学会が刊行した社会学雑誌の停刊年は、文献によってさまざまに異なる。すなわち、韓明謨は1932年11月の第5巻第4期(韓明謨著(1987)・星明訳(2005), 前掲書, p.84), 傅慄冬は1933年3月の第5巻第7期(ママ)(傅慄冬, 1991 a, 「社会学雑誌」, 中国大百科全書総編輯委員会《社会学》編輯委員会, 『中国大百科全書(社会学)』, 中国大百科全書出版社, p.347), 鄭杭生・李迎生ら年代はあげていないが、第3巻第3期だという(鄭杭生・李迎生, 2000, 前掲書, p.83)。ここでは、北京大学図書館の蔵書検索によって、民國十一-民國二十二年[1922-1933], 『社會學雜誌』, 編輯中國社會學雜誌社, C91/01 (1922 vol.1, no.1-2) から C91/01 (1932, vol.5, no.1-4) という書誌を採用しておきたい([http://162.105.138.200/uhb/cgisirsi/x/0/0/5?searchdata1=2289747 {key} &srchfield1=GENERAL^SUBJECT^GENERAL^words+or+phrase&searchoper1=AND&thesaurus1=GENERAL&search_entries1=GENERAL&search_type1=SUBJECT&special_proc1=&library=ALL&pubyear=&language=ANY&format=ANY&item_type=ANY&location=ANY&item1cat=ANY&item_2cat=ANY&match_on=KEYWORD&shadow=NO&sort_by=NONE](http://162.105.138.200/uhb/cgisirsi/x/0/0/5?searchdata1=2289747%7Bkey%7D&srchfield1=GENERAL^SUBJECT^GENERAL^words+or+phrase&searchoper1=AND&thesaurus1=GENERAL&search_entries1=GENERAL&search_type1=SUBJECT&special_proc1=&library=ALL&pubyear=&language=ANY&format=ANY&item_type=ANY&location=ANY&item1cat=ANY&item_2cat=ANY&match_on=KEYWORD&shadow=NO&sort_by=NONE))
- (10) この蔡毓聰の記述の約17年後、孫本文の1947年の調査によれば、総計145名の教授のうち、留学先はアメリカ74名、フランス11名、日本10名、イギリス9名、ドイツ4名、ベルギー1名で、その他はアメリカ人教授8名、無留学28名である(孫本文, 1948, 「中国各大学社会学教授姓氏録」(-民國36(1947)年12月調査-, 副教授, 講師を含む), 『当代中国社会学』, 勝利出版公司, pp.319-327)。
- (11) 春田調査については、穂山新の次の文章を引用させていただいた。「……シェルピィ・ハリソンが指揮して1914年に発表されたスプリングフィールド調査は、調査内容が大規模かつ包括的であっただけでなく、展覧会や雑誌などを通じて一般の人々に広く公開されることで、調査研究をより大衆的なものにしていく役割を果たした(Bulmer 1991: 293-5)。1920年代以降、ロバート・パークを中心とするシカゴ学派社会学が登場し、パークが……社会改良目的の社会調査を「計画の策定や政策の助言に関心を持つ社会的な政治家」に過ぎないと辛辣に批判し(Bulmer 1991: 303), 仮説を検証する科学としての社会調査(social research)を掲げて以降、社会部査運動は1920年代末までに衰退していくことになる。このアメリカ社会調査運動は、現在のテキストでは言及されることすらほとんど稀であるが、本稿で詳しく検討する中国の社会調査論の大部分や同時期の日本の社会調査の代表的テキストである戸田貞三『社会調査』(1933)が、先行業績としてブースや社会調査運動に多く言及しているように、社会改良目的の社会調査が歴史的に果たした役割は過小評価できないものがある……」(穂山新, 2016, 「近代中国における社会調査の実践と困難-李景漢の社会調査論と中国農村社会-」, 『社会学ジャーナル』41号, 筑波大学社会学研究室[編], pp.1-2)。
- (12) 蔡毓聰は出典の詳しい年度およびページなどをあげていないが、訳者が所持する原典によれば、詳細は次のとおりである。李景漢, 1927, 「中国社会学運動」, 『社会学界』, 第1巻, 燕京大学社会学系出版部, pp.80-81。なお、同巻の裏表紙の英文タイトル欄では、社会学界は*THE SOCIOLOGICAL WORLD*, 論題は*The Social Survey Movement in China*, 著者李景漢はProf. Franklin C. H. Leeとなっている。
- (13) 東南社会学会の成立の経過、規定草案の作成委員、委員長および各委員の姓名などについては、『社会学刊』第1巻第1期(1929)の「東南社会学会組織経過」に詳細な記述がある。また、この学会の大会とその経過、刊行物とその内容などについて星明, 2021, 前掲書, pp.23-28を参照さ

りたい。

〔謝辞〕

この訳稿に関して、城西国際大学の姜寅星先生と李穎清先生のお二人から多くの助言と指導をいただいた。原文は1931年刊行のもので、繁体字で、かつ印刷の不鮮明の箇所がそこかしこにあったので、お二人の助言にはほんとうに助けられた。ここに記して感謝申し上げます。

（ほし あきら 佛教大学名誉教授）

2022年10月20日受理